

# インド彫刻における人間の原像

山岡 泰造

古代インドの統一は、マガダ国のマウリア王朝によって達成されたといえるが、特に三代目のアショカ王によって半島の南端部を除くインド全域がその版図に入る大帝国が成立した。これは中国における秦の始皇帝の統一に比せられるべきもので、統一後の崩壊の急速な点も両者に共通である。

マウリア王朝期になって、ヤクシヤ・ヤクシー（葉叉・葉叉女神）と呼ばれる男女像の彫刻が出現するが、これは極めて写実的でしかも大型（等身大あるいはそれ以上）であるという点に特色がある。ヤクシヤ・ヤクシーの出現以前から地母神と呼ばれるテラコッタの小像がインド各地でつくられているが、これらは小さいうえにグロテスクな容貌・体軀をもつのが通例で、それだけに却って、ヤクシヤ・ヤクシーと呼ばれる大型でしかも極めて洗練された表現技術をもった男女の彫刻が、何の前ぶれもなしに突如として出現したことは、驚異ともいえる出来事である。

これは、秦の始皇帝陵から出土した兵馬俑や、御者つき四頭立馬車について感じるのと同じである。それまで中国には写実的でないやかで大型の人物像はなかったのに、何故このように突然しかも完成された技法・表現をもつものが成立するのか、このような疑問はヤクシヤ・ヤクシーについても同様に生じるのである。

勿論、マウリア朝の場合、ダリウス一世（BC

553-486）によって形成されたアケメネス朝ペルシアという世界帝国がその先例として存在するという条件もある。パトナの美術館にいくつか陳列されているマウリア朝のテラコッタの女性小像は通例の地母神

とは違ってかなり大きい上に、コート・レディともいふべき優雅さがあり、ギリシアのタナグラ人形に近い。これらは疑いなくアケメネス朝の影響であろう。また美しい動物像の柱頭をもつアショカ王柱やパトナ出土のディーダルガンジュのヤクシーなどにみられるチュナールの砂岩を磨き上げた洗練された技法もペルシアのものであろう。しかしヤクシヤ・ヤクシーの堂々たる体軀（男性は肩幅が広く腹をつき出し、女性は胸と腰を大きく張り出す）は疑いなくインド独自のものであり、しかもそれをモニュメンタルに表現しているのである。この点も中国人そのものの表現である秦の始皇帝の兵馬俑と同様である。

いったいこのような彫刻は何故出現したのか、ヤクシヤ・ヤクシーと呼ばれているものは果して神像なのかといった疑問が生ずるが、更に彫刻とは一体何なのか、何故成立したのかということも問題としなければならないように思う。

マウリア王朝と秦の始皇帝の場合、写実的で大型で成熟した表現をもつ彫刻の突然の出現は、明らかに統一国家の成立と関係している。しかもその民族にとってはじめての統一国家である。兵馬俑が始皇帝の軍隊そのものの忠実な再現であるように、マウリア朝の男女像もアショカ王の臣下としての人間であろう。例えば拂子（おぼろ）を持っている場合がある点からしてもこれらは神というより人間であり王の臣下（あるいは神に仕えるもの）としての人間である。それは絶対君主（あるいは神）の侍者にふさわしいように堂々たる容貌と体軀をもった理想的な人間像でなければならぬ。

一般に、呪術的な意味をもつ地母神などと違って、古代の統一国家成立期に出現する大型の写実的な人間像の彫刻は、エジプトの場合もメソポタミアの場合も、ギリシア・アルカイック期のいわゆるクーロス・コレーの男女像も、始皇帝の兵馬俑もマウリア王朝のヤクシヤ・ヤクシーと同様、神像と考えるよりも、各民族の統一の気運に対応する、その民族の理想の人間像、いわば各民族の原像と見る方がよいのではないだろうか。だいたい神々にしても君主にしても、それらが本当に力をもっている時には、真に人々にとって畏怖すべきものである時には、つまり神々や君主が生きている時には、姿は見えないもきであろう。従って神像や君主の肖像が出現するということは、人々が何らかの意図をもって神々や君主を利用する場



① ディーダルガンのヤクシー（パトナ出土・紀元前3-2世紀）

合であろう。神々がほんとうに生きている時には神像はないのが当然である。神像はいわば神々の矮小化である。神々にせよ君主にせよ、これを彫像として、人間像として表現するということは、人間のかたちの中に神性や君主の権威を宿らせることであり、それは偶像である。偶像が成立するためには、やどるべき場所、つまり人体の像がそれに先立って成立していなければならない。つまり各民族にとっての基本的な人間像つまりその民族の原像というべきものがまず成立していて、それに神性なり君主の権威を宿らせるのでなければならない。そのような人間の意図が原像に加えられることによって、原像の迫力がそれだけ減少するのは止むを得ない。原像は神の眼あるいは絶対君主の眼から見た人間像である。それに人間の意図あるいは精神による細工が加えられれば、原像の物的存在感は弱まる。インドの場合、クシャナ王朝のカニシカ王のころに仏教が成立したが、それは仏陀自身の生きた記憶が失われ、その教えや思想がひとり歩きを始めた時代であった。いわゆる大乘仏教の成立期である。それまでは、つまり仏陀の生きた姿やなまの声が入る心の中にある間は、仏陀の像はなかった。インド人ならざる遊牧民月氏族の中にも仏陀の教えが理論として入って行き、その理論の確立者の姿を理論の象徴として欲したとき、彼らはギリシアの神々の姿（あるいはヘレニズム世界の間人像）を借りてそれを表現したのである。すなわちガンダーラの仏像である。一方、インドのマトウラーでもほぼ時を同じ



② ヤクシャ  
(カルカッタ美術館・紀元前2世紀)

くしてインド的な仏像が出現した。マトウラーはマウリア王朝の版図を縮小しながら受けついでシュンガ王朝の西の端にあたり、クシャナ朝では北の都（夏の都）ベシャワールに対する南の都（冬の都）



③ ヤクシー  
(カルカッタ美術館・紀元前2世紀)

であった。ここには仏像成立以前からマウリア王朝以来の造像の伝統があり、いわゆるヤクシャ・ヤクシーにおいてインドの間人像が確立しており、それが直ちに仏像の表現に利用されたのである。それはマトウラー出土のいわゆるパールカムのヤクシャ（シュンガ朝・紀元前二世紀）と、菩薩立像（クシャナ朝・二世紀）を比べれば一目瞭然である。

彫刻は物である。それは人間の精神に対立あるいは先行するものとして、神の造ったものである。人間の歴史は精神の歴史であり、もっぱら見る人間の立場からの歴史である。それに先立って神の眼から見た人間の像がまず造られているのである。日本の埴輪の人物像成立についても、同じようなことが考えられるかも知れない。



④ パールカムのヤクシャ  
(マトウラーナ出土・紀元前2世紀)